

2015

# 「少年の主張」・ 中学生話し方大会



**日時** 平成27年9月19日(土) 9:30~15:00

**会場** エソール広島 (広島市中区富士見町11-6)

# は じ め に

「少年の主張」・中学生話し方大会 2015（第 37 回「少年の主張」広島県大会，第 49 回中学生話し方広島大会）を広島県中学校話し方連盟及び独立行政法人国立青少年教育振興機構と共催で，平成 27 年 9 月 19 日（土）に開催しました。

この大会は，中学生が学校生活や家庭生活の中で，日頃思っていることや，感じていることを素直な言葉にまとめて発表することにより，論理的に物事を考える力や自分の主張を正しく伝える力，さらには広い視野と柔軟な発想や創造性などを身に付けることを目的として，毎年開催しています。

今年度は，県内の中学校 55 校から 6,981 編の応募があり，その中から原稿審査を通過した 24 名が，それぞれの主張を力強く発表しました。

中学生たちは，学校生活や家庭生活上で経験したことから，広く社会に目を向けた被爆の問題や環境問題まで，身近な出来事，体験をしっかりと見つめて，自分の考えを導き出していました。また，人としての思いやりも様々な形で表現され，中学生らしい素直さ，真剣さが伝わり，聴く私たちに深い感銘を与えてくれました。

この記録集には，発表者全員の顔写真と，その中で特に優秀な成績を修めた 12 人の発表内容を記録しております。多くの方々にご覧いただき，中学生の思いを受け止めていただくことを期待しております。

終わりに，この大会の開催にあたり，ご協賛いただいた国際ソロプチミスト広島，広島清流ライオンズクラブ及び公益財団法人広島青少年文化センター並びにご協力いただいた関係者の皆様方に改めて感謝申し上げますとともに，今後とも本事業へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 12 月

公益社団法人 青少年育成広島県民会議  
会 長 上 田 宗 岡

# 目 次

|                                                            |    |
|------------------------------------------------------------|----|
| ○第 37 回「少年の主張」広島県大会・第 49 回中学生話し方広島大会会場風景                   | 1  |
| ○第 37 回「少年の主張」広島県大会・第 49 回中学生話し方広島大会発表者一覧                  | 2  |
| ○受賞者一覧                                                     |    |
| 広島県知事賞，少年の主張全国大会内閣総理大臣賞                                    |    |
| 語る思いと聞く思い          広島市立国泰寺中学校    2 年   藤井   志穂             | 5  |
| (公社) 青少年育成広島県民会議会長賞                                        |    |
| 聞こえる世界で知ったこと    府中町立府中中学校    3 年   山口   夏鈴                 | 6  |
| 広島県中学校話し方連盟会長賞                                             |    |
| 僕と平和                      広島市立二葉中学校    1 年   牟田悠一郎         | 7  |
| 国際ソロプチミスト広島会長賞                                             |    |
| 命の揺れ                      広島市立中広中学校    3 年   松陰   未羽       | 8  |
| 広島清流ライオンズクラブ会長賞                                            |    |
| 届けよう                      広島県立広島中学校    2 年   宮尾日菜子         | 9  |
| 優 秀 賞                                                      |    |
| 被爆70年，私たちの使命      安芸高田市立美土里中学校    3 年   齋藤   杏実            | 10 |
| 一枚の紙                      江田島市立江田島中学校    3 年   秋村   日菜     | 11 |
| 心の支え                      竹原市立賀茂川中学校    3 年   中前   愛泉      | 12 |
| バナナの輪                      山陽女学園中等部    3 年   井元   遙花       | 13 |
| 明日へのキックオフ              呉市立阿賀中学校    3 年   森山   敬仁           | 14 |
| 伸びゆく私                      広島県立広島中央特別支援学校    3 年   田村   愛優 | 15 |
| 何時か                      広島市立宇品中学校    1 年   山田   太治        | 16 |
| ○講 評                                                       | 17 |
| 審査委員長   山本   名嘉子   東京教育研究所主任研究員・広島教育実践研究所所長                |    |
| ○第 37 回「少年の主張」広島県大会・第 49 回中学生話し方広島大会開催要領                   | 20 |
| ○審査員及び審査基準                                                 | 22 |



# 会場風景



大会開始前の客席



審査委員・会場風景



主催者及び来賓登壇



表彰式の風景

# 「少年の主張」・中学生話し方大会 2015

## 発表者一覧

---



基準  
『大きな一歩』

広島市立中広中学校  
3年 三木 彩



4番  
『バナナの輪』

山陽女学園中等部  
3年 井元 遥花



1番  
『「こ食」改善論』

坂町立坂中学校  
2年 光井 満月



5番  
『僕はなりたい』

三原市立第二中学校  
3年 梅田 叶夢



2番  
『何時か』

広島市立宇品中学校  
1年 山田 太治



6番  
『責任感の大切さ』

広島市立東原中学校  
3年 曾根 花音



3番  
『届けよう』

広島県立広島中学校  
2年 宮尾日菜子



7番  
『おいしい未来の話』

北広島町立大朝中学校  
3年 栗栖 杏実



8番  
『思いやりの難しさ』

広島市立戸坂中学校  
3年 平田 源貴



12番  
『伸びゆく私』

広島県立広島中央特別支援学校  
3年 田村 愛優



9番  
『一枚の紙』

江田島市立江田島中学校  
3年 秋村 日菜



13番  
『ともに生きる』

三次市立三次中学校  
3年 伊藤万由良



10番  
『聞こえる世界で  
知ったこと』

府中町立府中中学校  
3年 山口 夏鈴



14番  
『仕事のキーワード』

尾道市立長江中学校  
2年 園田 悠人



11番  
『僕と平和』

広島市立二葉中学校  
1年 牟田悠一郎



15番  
『心のカラー』

廿日市市立吉和中学校  
3年 森田友里沙





16番  
『被爆70年, 私たちの使命』

安芸高田市立美土里中学校  
3年 齋藤 杏実



21番  
『私なりのオンリーワン』

東広島市立松賀中学校  
3年 石原 寧渚



17番  
『布野町横谷に住む僕』

三次市立布野中学校  
2年 石田 浩之



22番  
『命の揺れ』

広島市立中広中学校  
3年 松陰 未羽



18番  
『あこがれた学校生活』

尾道市立高西中学校  
3年 西本 沙智



23番  
『明日へのキックオフ』

呉市立阿賀中学校  
3年 森山 敬仁



19番  
『語る思いと聞く思い』

広島市立国泰寺中学校  
2年 藤井 志穂



24番  
『心の支え』

竹原市立賀茂川中学校  
3年 中前 愛泉



20番  
『ゴミが  
絶えさせてしまった命』

庄原市立比和中学校  
3年 永岡 和喜

# 広島県知事賞，少年の主張全国大会内閣総理大臣賞



## 語る思いと聞く思い

広島市立国泰寺中学校

2年 藤井 志穂

「被爆者の高齢化が進む今，10代は経験を聴ける最後の世代です。私たちは記憶を次世代へ残していかななくてはなりません。」そう書きかけた原稿を私はぐしゃぐしゃにして捨てました。私はジュニアライターという，被爆体験を聞いて記事や感想を書く活動をしています。私は何度か取材をする内に，この活動が苦しくなっていました。

特に残っていることがあります。それまで穏やかに取材を受けていたその人は，ふいに優しい表情を崩しました。長い沈黙の後，一言。「おかあさん」と呟いてから引きつったように笑いました。でも目は笑っていませんでした。それから人が変わったように喋り始めました。グロテスクな話も心痛い話も質問を入れるスキもない位に。

取材が終わって，じわじわと恐怖が湧いてきました。話し始めと沈黙の後との表情のギャップ。それは私が家族の被爆状況を聞いた時に起こった事なのです。あの人は隠したい所に私が触らないように，笑顔で牽制していたのではないかと，私はそれを無視し一番深い傷に触れたのではないかと。

私は被爆者への取材を避けるようになりました。もうこれ以上被爆者の方を苦しめたくない。苦しめてまで聞く事にどんな意味があるのか。活動に対する疑問で一杯でした。

ある日，取材の人数不足で呼ばれ久々に私は被爆体験を聞く事になりました。話し手をAさんとしします。Aさんはなぜか妹さんの事だけ話してませんでした。「妹さんはどうなったんですか。」Aさんから表情が消えました。

「妹は死にました。全身焼けて。水を，と言われたけれど垂れた皮膚が口を塞いでいて飲ませてあげられなかったんです。」

苦しげな表情に私は声をあげました。

「ごめんなさい！もう話さなくていいです。」

「謝らないで。私がなんのために話しているか分かりますか？この苦しみを残すためです。あの地獄を思い出すと吐きそうな程悲しくなります。私はあの頃，死にたかった。友達も家族もいなくなって。でもその先の人生を歩む内に，死んだ皆の幸せも叶えるために生きているのだと思うようになりました。でも私の人生だけでは足りないです。そのために私ができるのは，辛い経験をもう他の人にさせない事。あなた達の未来を守りたい。どうか，忘れないで。」

圧倒されました。そして恥ずかしくなりました。「苦しんででも話す」という決意に今まで私は気付けなかったのです。語る側の熱い思いに対し，「苦しめているのでは」という聞く側の心配はなんてちっぽけだったのでしょうか。

家に帰った私は，投げ捨てていた原稿を広げ書き直しました。「私たちは記憶と共に，その記憶に刻み込まれた一つ一つの苦しい経験と反戦への強い思いを引き継いでいかななくてはなりません。」

私は聞きます。被爆者の全ての思いを真正面から受け止めて。そして伝えます。一つ一つの思いが読み手の心に届くように，全力で。



## (公社) 青少年育成広島県民会議会長賞



### 聞こえる世界で知ったこと

府中町立府中中学校

3年 山口 夏 鈴

私は軽度難聴です。普通の人より少しだけ耳が聞こえにくいのです。分かり易く言い換えると、小中学校の九年間で聴力検査の音は一度も聞こえたことはありません。だから、定期的に病院へ行って検査をしています。

今年6月初旬の検査の時に、また補聴器を試すことを勧められました。私は頑なに拒否していました。自分ではそこまで聞こえていないと思っていないし、検査の結果だって悪くなっている訳でもないのに着けたくない！と思っていたからです。けれど一緒にいた母の、体験するだけなんだし…といった様子に押され、渋々試すことにしました。

7月中旬、私と母は専門のお店に行き、乗り気でないままの私は無言でした。しかし、店員さんの持ってきた補聴器に目を見張りました。「これ、補聴器なんですか？」思わず聞いてしまうほど驚きました。私の補聴器に対するイメージは、お年寄りの方が着けているような大きくて、目で見て分かり易いものでした。そのイメージと、店員さんが持ってきたものとは全く違ったからです。耳に着けると、よく見ないと分かりにくい程小さくイヤホンにも見えるようなものでした。私はそれを着けました。その瞬間、「サー・・・」という音が聞こえてきました。それはお店の空調の音で、補聴器を着けていない時は、一切聞こえていなかったものです。急に飛び込んできた私の知らない「聞こえる」世界は不思議な世界でした。お店を出ると、まるで演出のため音声をはっきりさせている映画のように、音がはっきり聞こえました。近くのコンビニエンスストアのベルや車が通り過ぎる音、人の足音、シートベルトを締める音。思わず感動と衝激の涙が出ました。こんなに生き生きとした素晴らしい音が、世の中にはあるんだ、ということと、15年間それを感じられておらず、聞こえていなかった音はあまりに多すぎて、私の耳は悪いんだと実感しました。

学校でも着けました。正直友達の反応は怖かったのです。重い空気になったり笑われたりするのではと不安になったり、小さいから気づかれずに過ごせるかも…と色々なことが頭をよぎりました。授業後、後ろの席の友達が少し控えめに、「それって、補聴器だよね？」と聞いてきました。動揺を悟られないよう私は小さく頷きました。すると友達は、「すごい！そんなに小さいの？何が聞こえるん？」と言いました。私は本当に驚きました。重い空気にするどころか、明るく私に尋ねてくれたのです。小学校から一緒の友達も、いつも言い合うクラスの男子も、皆同じように「よかったね！」と明るく受け入れてくれました。私は無駄に警戒していたことを申し訳なく思いました。補聴器に対して偏見を持っていたのは私の方だったのです。

それからの私は隠さずに補聴器を着け、聞こえてくる音全てに耳を澄ませました。葉っぱの揺れる音や皆が教科書をめくる音。普段過ごしている場所なのに別の場所のようで、皆と同じように聞こえることの嬉しさで一杯でした。

この出来事から人より聞こえていない事実をしっかりと受け止め、聞こえないことを隠したりしなくなりました。先入観や偏見を持たずに挑戦してみるものだと思います。周りは受け入れてくれるものだと思います。身にしみて、私が気づき得たことです。

自分以外の人のアドバイスを素直に聞いたり、自分の知らない情報をまず見て挑戦したりした方が、自分の世界が広がり成長できると感じています。もちろん、自分の意見は大事です。自己主張したらそのことに対する反応も大事だと考えています。聞いてくれる温かい周りに目を向け、広い視野で物事を考えられる人でありたいと強く思います。

## 広島県中学校話し方連盟会長賞



### 僕と平和

広島市立二葉中学校

1年 牟田 悠一郎

「みなさんは、平和とは何か一度でも考えたことがありますか？」少し前まで僕は全然ありませんでした。なぜなら僕は「戦争」を知りません。何が平和かなんて分からなかったからです。広島に原子爆弾が落とされたのも「知っている」というだけで、想像もできず目を背けていました。

僕は小学校の平和学習で「仲ちゃんの三輪車」や「おこりじぞう」などの原爆に関するビデオや本を見たり、原爆の被害にあった場所をめぐって話を聞いたりしました。しかしどれも、自分とは関係のない遠いものに感じ、結局「平和について深く考えるきっかけ」にはなりませんでした。

そんな時に会ったのが「子供ピースサミット」という平和についての思いを作文にするというものでした。ぼくはこれまで平和について深く考えたことがなかったのでとても困りました。いくら考えても何も思いうかびません。原爆資料館にいったり、「はだしのゲン」などの原爆や戦争についての本もたくさん読みました。ですが何をしても、それが今の僕たちのくらしからは想像もできず、何も思いうかびません。もうどうしていいかわからず、母に相談すると思ってもよらぬ言葉が返ってきました。

「おじいちゃんに聞いてみんさい。いろいろ教えてもらえると思うよ。」

実は祖父は、3歳の時に被爆していたのです。僕は信じられませんでした。あのいつも明るくて元気な祖父が、悲惨な「戦争」を体験し、被爆までしていたなんて。僕は「戦争」「原爆」というものが急にこわくなりました。

それから数日後、勇気を出して聞きに行った祖父の話は、とても恐ろしく、悲しいものでした。気分が悪くなってご飯が食べられなくなるほどです。祖父からこの話を聞いた父が、

「そんな話、今まで聞いたことがなかった。」

と言うと祖父は、

「言うことでもない思うたんじゃ。」

と言っていいました。しかし僕は、祖父は言えなかったのではなく思い出すのが辛く自分から言い出せなかったのではないかと思います。祖父が見た地ごくのような光景の話、体の半分がやけどでドロドロになった祖父の父の話。こんな話を自分から言い出すのにはとても勇気がいると思います。僕は、戦争の恐ろしさや平和の尊さを知るにはまず戦争を体験していない自分達からこのような話をしっかり聞こうとすることが大切だと思います。

僕は、祖父の話をきっかけに「戦争」や「原爆」、「平和」などについてより深く考えるようになりました。折りづるもたくさん折りました。「子供ピースサミットの作文」は何度も何度も書きなおし、提出期限のギリギリまで考え続けました。その気持ちが通じたのか作文が選ばれ、去年、毎年平和記念式典で行われる「平和へのちかい」を子供代表として読み上げることができました。そのちかいの中の最後に、

「たくさんの違う考えが平和への大きな力となることを信じて。」という言葉があります。

「僕が考える平和。」それは、みんなが安心してくらせること。どんなときも笑っていられること。そして、世界中の人々が幸せだと感じられること。たくさんの人が、それぞれ自分の思う「平和」を持っているんだと思います。しかし、その平和も自分たちが行動しなければ実現どころか、何も始まりません。僕はまず向き合わなければいけないと思います。戦争の事実や被爆者の思いと。

「みなさんは平和とは何か一度でも考えたことがありますか？」僕はあります。平和とは僕たちの夢や未来を照らす「光」なんだと思います。その光の中で僕は真っすぐ歩き続けます。

## 国際ソロプチミスト広島会長賞



### 命の揺れ

広島市立中広中学校

3年 松 陰 未 羽

私は、命が揺れる瞬間を感じたことがあります。死ぬかもしれない。世界が崩れていくという恐怖は、今もはっきり覚えています。

それは、2011年3月11日に起こった東日本大震災のことです。その時私は、小学4年生で、ここ広島ではなく栃木県に住んでいました。私の苦手な算数の授業。先生の声だけが響く静かな教室。そんな日常に突然、大きな揺れが襲いかかったのです。今までに感じたことのない大きな衝撃に私は固まってしまいました。かん高い悲鳴の中、先生の

「机の下に隠れなさい。」

という言葉で私たちは一斉に机の下にもぐりました。いつもふざけている男子の唇は固く閉じられ、顔も引きつっていました。電車に乗っていて右に左にと急カーブが続くような強く長い揺れでした。これでもか、これでもかと続いた揺れがやっと収まり、ほっと一息つこうとした瞬間

「みなさん、校庭に避難します。早く教室を出てください。」

という先生のあせった声が響きました。誰一人ものを言わず、私の耳にはたくさんの人の足音だけが響いていました。校庭に全校生徒が集まり、親が迎えに来た人から解散となりました。私は、母と家の近い友人と帰りながら、「こわかったね。家の棚倒れているかも。」などといつになくおしゃべりになり、不安を紛らわせていました。家に帰ってまっ先に飛び込んできたのは、倒れた棚ではなく、テレビの中で嘘みたいに流れる家でした。一人ぼっちになった女の子。いつまでも子供を捜す母親。そんな映像が、それから毎日のようにテレビでは流れていました。いつもなら前日のテレビ番組の話題でにぎやかになる教室が、しばらくは無意識に震災のことをさけていました。それと同時に冗談半分の「死ね」といった命を軽く扱う言葉を誰も言わなくなりました。

それから約1年後、私はここ広島に引越してきました。広島出身である両親、被爆者である祖父母からは、原爆が落ち70年間苦しんでいる人たちがいるとよく聞かされていました。ヒロシマの話をするときは怖いくらい真剣な祖父。しかし、戦争で亡くなった小さな妹の話をする時は、温かい思い出をなつかしむようなやわらかい表情でした。もし、私が原爆を体験していたら、冷静に当時のことを語るができるのでしょうか。そんなつらい体験をしたのに誰かに優しくほほえみかけることができるのでしょうか。私は、強い心を持っているのでしょうか。戦争中であつた70年前は、誰もが毎日命の揺れを感じていたんだと思います。私もほんの一時かもしれませんが、命の揺れを感じた人間の一人です。

命は簡単に揺れるのです。原爆のとき、もし祖父母が生きぬいていなかったら。震災のとき、もし私が何かにまきこまれていたら。私は今、ここにいなかったかもしれません。私の命は生かされている命なのです。ならば、今この一瞬を大切に生きていきたい。私は今、15歳です。これから多くの人と出会い、たくさんのことを経験していくでしょう。「この一瞬を大切に」この言葉を胸に刻んで、いつも輝いて生きたいです。今私は、ここにいます。

# 広島清流ライオンズクラブ会長賞



## 届けよう

広島県立広島中学校

2年 宮 尾 日 菜 子

思いやりの心は、もつだけではなく、相手に届かなければ意味がない。そう考えさせられる出来事がありました。

電車の中でのことです。目の不自由な女性が乗ってこられました。付き添いの方とは、電車に乗るときに別れたようでした。女性は「すみません。席は空いていますか。」と声をあげられました。しかしあいにく席は空いていません。すると、女性の近くの席に座っていた女子高生3人が黙って席を立ちました。「優しい人たちだな。立派だな。」私はそう思いました。しかし、女性は目が不自由なので、席が空いたことに気づきません。「すみません。席は空いていますか。」女性はもう一度同じことを言われました。そのとき、70歳ぐらいの男性が「こちらが空いていますよ。」と言われました。なかなか声をあげることでできなかった私は、ほっとしました。しかし女性は「こちらでは私にはわかりません。立っておきます。」と残念そうな声で言われたのです。私はドキッとしました。その男性は「ああ、すみません。こちらです。」とゆっくり女性の手をひき、席まで案内されました。女性はやっとほっとしたような表情になり、お礼を言われました。電車に温かな空気が流れました。

私は、この出来事を通して、思いやりの心は相手の立場に立って本気で考えて初めて、相手に届くものだと思うようになりました。

「思いやりの心をもとう」などといったフレーズをよく耳にします。私も「手助けしたい。」と思うことはよくあります。しかし、本当の思いやりは、思うだけではなく、相手に届くものでなければいけないのです。電車の出来事で考えると、それができたのはその男性だけでした。「目が見えない。」という相手の立場に立って行動した彼こそが、本当の意味で思いやりの心がある人だったといえます。

このことは、いろいろな場面で言えると思います。困っている人に出会ったとき、思いやりの心を持つだけでなく、そこから、もう一步相手に歩みよる。すると、その男性のように、より相手の立場に立って考えることができるのかもしれません。相手に声をかけて近づいて、思いやりの心が届いて初めて「思いやり」が成立するのです。

そのことに気づいたものの、私はなかなか届ける一步が踏み出せません。だから、もどかしい思いに苦しくなることもよくあります。それでも踏み出せないのは、「恥ずかしい。」という思いをもってしまうからです。だからそんなときは「人を思いやることは、決して恥ずかしいことではない。むしろ誇らしいことなんだ。」と自分に言い聞かせることにしています。

それと同時に、今自分にできることから始めようと考え実践していることがあります。後から通る人が気持ちよく歩けるように、道路に落ちているゴミを拾うことです。私は、このような小さなことから始めました。小さなことでも積み重ねれば私を動かす大きな力になる気がしています。こうして、思いやりをもって行動することに徐々に慣れていくことで、「恥ずかしい。」と思うことなくいつか自然に行動に移せる気がするのです。

「思いやりの心」それはもつだけではなく、届けなければいけないもの。私は、思いやりのある行動ができるようになりたいと思います。





## 被爆 70 年，私たちの使命

安芸高田市立美土里中学校

3 年 齋 藤 杏 実

被爆 70 年。今年，また一つの節目を迎えました。

1945 年 8 月 6 日，午前 8 時 15 分，広島に原子爆弾が投下され，13 万人以上が犠牲となりました。生き残った人も大量の放射能を浴び現在でもたくさんの人々が苦しんでおられます。私は「学ぼう ヒロシマ中学生新聞」の河田和子さんの体験談が目にとまりました。

原爆で焼野原となり変わり果てた人々の姿を見ても，お父さんが亡くなくても涙は流れなかったそうです。遺体が焼かれ「プスー」という音とともに腹部が割れオレンジ色の腸がむくむくと出てきたのを見ても，悲しみ・恐ろしさ，何もなかったそうです。

しかし，年を重ねる度に，悲しみ・恐ろしさ無くなった感情が，強くなっているのだと言います。私は原爆が，人体だけでなく，心をも傷つけ感情を奪ってしまう事に衝撃を覚えました。戦争は，今でも河田さんを苦しめているのです。

平成の世に生まれた私は，当時の状況を想像すればする程，胸が苦しくなります。自分が「あの当時存在していたら」と思うと恐ろしくてたまりません。今に生きる私たちは，当時の人達の苦しみや恐怖，悲しみの全てを体験することはできません。しかし，そのつらく悲しい体験を，私たちに伝えてくださる，心の叫びを受け止めなければならないと思うのです。

私は今まで，戦争によって得る平和を望む人はいないと思っていました。しかし，クラスで平和について意見を交わした時「国の平和を守るためだったら戦争をしても良い」という人がいました。私は「戦争は，平和を奪うものでしかない。同じことを繰り返せば，今度は，私たちが犠牲になる。」と怒りにも似た憤りが胸を駆け巡りました。でも，その後『8 時 15 分～広島で生きぬいて許す心』という本の内容，原爆が残した大きな傷，暗く重い影。憎しみにとらわれない大きな心。

それを聞いたクラスメイトは「やっぱり戦争はいけないものだ」と考えが変わったのです。初めは人それぞれ違う考えを持っていても，戦争についての本を読み，体験者から話を聞くことで戦争はいけないと心をつにすることができると感じました。

世界に目を向ければ，アメリカ・ロシアをはじめ，たくさんの核兵器保有国があり，これでは本当に安心して生活などできません。その苦しみ・悲しみを抱えた日本には，核廃絶を声高に訴えていく責任があります。

私は，小学 4 年生の時の平和学習で語り部の石津さんと出会い，原爆の爆音・閃光とともに失った身内の話を聞き戦争について考えました。そして母に原爆資料館に連れて行ってもらいましたが，当時の私は，展示物のジオラマのあまりの凄惨さに目を伏せ，その場をとおりすぎてしまいました。被爆の事実から目を背けるように……。しかし，今の私は違います。あれから社会で起こる様々な事件や災害を見聞きすることで「逃げていては始まらない」と思うようになったのです。

だから，「どうすれば平和を築くことができるか？」ということを考えながら生活していきます。まずは，身の回りで起こる小さな諍いも自分ばかりを主張せず，相手の気持ちもきちんと聞き，大きな争いにならないようにしていきます。そして，二度とこの惨劇が繰り返されないように，戦争についての知識を深め，後世に語り継ぐ事が私たちの使命だと思います。



## 一枚の紙

江田島市立江田島中学校

3年 秋 村 日 菜

「じいちゃんが入院。」

あれは、突然の出来事でした。優しくった祖父が、アルコール依存症で入院したのです。さらに悲劇は続きました。母は、仕事帰りの祖父の看病で睡眠不足だったために命を落としかねないような交通事故に遭ったのです。辛そうな母、仕事で疲れている父、甘えたくても甘えることができない幼い妹と弟、そして、ただイライラする私。家族はすれ違い、バラバラになってしまいそうでした。

私の母は、18歳の時に私を産み、私より5つ下の妹と私を女手一つで育ててくれました。口うるさくて、怒りっぽくて、朝起きることも、料理をすることも苦手でした。私が小学4年生の時、母が再婚して広島市から江田島市に引っ越してきました。

「日菜、ママね、結婚したい人がおるんじゃないけど、日菜はお父さんができるの嫌。」

「ううん、嫌じゃないよ。」

母が楽になるかもしれないと思って返事を返したけれど、本当はとても嫌でした。知らない人が私の父になるなんて考えられなかったのです。

私の新しい父は、外国船を誘導するタグボートの船長です。母は、仕事をしながら家事もこなして、苦手な料理も頑張っていました。そんな母の負担にならないように、新しい父に好かれるように、ずっと良い子で笑っていようと心に決めました。しかし、懐くのが上手な妹は私を置いてどんどん家族のようになっていきました。ここに私の居場所はあるのか、あるとしたらどこにあるのか分からなくて、ただただ寂しくて。転校した学校では、信頼できる友達もうまく作れず、辛い毎日でした。本当の自分を知ってもらうことを怖がる自分にずっとイライラしていました。自分が嫌になり、学校にも行きたくなくて。あの頃は、何もかも楽しくありませんでした。そんな時、弟が生まれ、妹より大きな私の手が必要とされました。居場所が見つかり、毎日がとても幸せでした。

しかし、祖父の入院、母の交通事故という突然の出来事で、私の前から幸せな毎日が消えました。父と母はよく喧嘩をするようになり、私たちに当たるようになりました。自分の時間や勉強の時間を、家の手伝いに費やし、なんとか母の機嫌をとろうと笑顔を作り続けて頑張りました。しかし、何も変わりませんでした。私は、本当の自分と居場所を見失ってしまい、どうすればいいのか分からなくなってしまいました。そんな時、母が手紙を書いてくれました。「日菜、ちゃんと見てるから。ごめんね。」小さな紙に、母の温かい心に、自然と涙が溢れてきました。私の居場所はちゃんとあるんだ、そう思いました。それからの私は、何でもポジティブに捉えようと心掛けました。最近は心許せる友達もできて、毎日がとても楽しいです。あの時母からもらった一枚の紙が、私の光となりました。だから、多くの人に伝えたいと思います。何か上手くいかないことがあると、イライラして投げ出したくなることもあると思います。それでも諦めないでください。ちょっとしたきっかけで、光が見えてくることがあると思います。母からの一枚の紙で、私が光を見つけたように。



## 心の支え

竹原市立賀茂川中学校

3年 中 前 愛 泉

平成 18 年 2 月 11 日。この日の夜、私の母は突然この世からいなくなりました。

「ねえ、起きてよ！ママ、起きてよ！」

私は必死に母に言いましたが、母は二度と目を開けることはありませんでした。この日以来、私の頭には、こんなことが巡るようになりました。『永遠ってこの世に存在するのだろうか？』

けれども、その一方で当たり前に繰り返される日常を、何気なく過ごしている自分もいるのです。友達とたわいもない話をして過ごす楽しい時間。部活動で仲間と音楽を奏でる充実した時間。「ただいま」と玄関を開ける瞬間。このような日常がみなさんにもあり、そのことを気にもとめず、毎日を過ごしているのではないのでしょうか。

ある日、私は東北大震災に遭った当時 12 歳の男の子、箱石佑太君の日記を目にしました。箱石くんは、地震が起きた時に「どうせいつもの地震だ。大丈夫。」と思っていたそうです。車に乗って行った父を不安に見送りながらも、「父は必ず帰ってくる。」と思っていたのです。しかし、父が生きて帰ってくることはありませんでした。

私は、この記事を見てはっとしました。「私と同じだ。私も母が亡くなるなんて思ってなかった。」母が亡くなり、私は自分の運命を恨みました。それとともに、母がどんな気持ちで私を育ててくれたのか知りたいと思うようになりました。

そんなある日、母からのメッセージを見つけたのです。それは、私の育児日記でした。そこには、「睡眠時間が短くて辛い。でも、愛泉の成長が何よりもうれしい。早くいろんなことを一緒にしようね。」と書かれていました。この母の綴った文章から母が苦勞して私を一生懸命育ててくれたことを知りました。

そして、その母の無償の愛を心からありがたいと思い、今の私があるのは、母がいてくれたからだと思えました。

みなさん。みなさんにとって大切な人は誰ですか。「親がうざい」、「死ね」このような言葉をよく耳にします。でも、本当に大切な人が目の前からいなくなったらどうでしょうか。話をしたいのに、話ができない寂しさにあなたは耐えられますか。考えてみると、今ここに生きることが幸せなことであり、奇跡なのです。あの日まで私は、家族がいる幸せな日常が永遠に続くと思っていました。でもその当たり前の日常がなくなって、初めて気付いたのです。「ああ、当たり前ってこんなにも幸せなんだ。」と。私たちは、今ここに生かされている。だから、「今」をかけがえのないものとして生きていかなければならないのです。

私自身、自分の運命を恨んだこともありましたが、日記を通じて母の偉大さを知り、母とのつながりを感じ、前向きに生きていきたいと思えるようになりました。私も母のような優しい笑顔で、すべてのものに感謝し、生きていきたいと思います。



### バナナの輪

山陽女学園中等部

3年 井 元 遥 花

スペインサッカー１部リーグ、バルセロナ対ビジャレアル戦でバルセロナのダニエウ・アウヴェス選手に対して、観客がバナナを投げ込むという人種差別がありました。バナナを投げる行為は、有色人種に対して、人間ではなくサルのようにだと侮辱する行為です。

しかし、彼はその時、どのように対応したのでしょうか… なんと、投げ込まれたバナナを拾って平然と食べ、何事もなかったようにコーナーキックを蹴ったのです。

私は、この行動に驚きました。怒って、真っ向から反論するのではなく、笑い話にしようとしたのです。彼は試合後「差別にもユーモアで対応するべきだ」と話したそうです。

「やられたらやり返す。倍返しだ！」おとしよく聞いたフレーズですが、近頃、倍返しを良しとする風潮があるように感じます。しかし、こうした考え方を、私は恐ろしいことだと感じます。なぜなら、やられたら、やり返していたのでは、いつまでも復讐の連鎖を止められないからです。この復讐の連鎖の行き着く先が戦争です。

こうした負の連鎖を止める一つの方法として、アウヴェス選手のとった行動は良い方法だと思います。さらに、彼の行動は人種差別について多くの人が考えるきっかけにもなりました。そして、彼の行動に賛同したブラジルのサッカー代表ネイマール選手が自身のSNSに「我々は皆おなじサルだ」と書き込み、バナナを持った写真をアップしたことで、一層大きな波紋が広がりました。イタリアの首相やヨーロッパで活躍する日本人選手なども、次々にバナナを食べる姿を公表し、バナナの輪が世界に広がっています。

文化や肌の色、言葉などが違う、そう言って、異なる国家や民族をバカにする人がいます。もともと人間はひとりひとり違う存在で、同じ人は一人もいないのですから、他人と自分が違うことを不思議に思い、違和感を感じるのは当然です。しかし、他人と自分の相違を理解しようとせず、批判するのは間違っています。相手のことを理解し、受け入れようとする努力をすれば、人種差別はなくなります。

こんなふうに、私が人種差別について考えるきっかけをくれたのもアウヴェス選手の行動です。残念ながら、こうした人種差別的行為は日本のＪリーグなどでもありました。私たちの身近にも人種差別はあるのです。どうか皆さんも、人種差別を遠い世界のことや他人ごとと考えず、私と同じように考えて見てください。考える人が増えるだけで、差別は減ります。

この心温まるバナナの輪が広がり、少しでも人種差別が減り、世界に争いがなくなることを願います。また、私自身は絶対に差別をしないことを誓い、主張を終わります。





## 明日へのキックオフ

呉市立阿賀中学校

3年 森 山 敬 仁

「2年生なんかにポジションを渡すもんか。ゴールを守れるのは僕しかいない！」半年前の僕だったら、きっとこんなことを思っていたでしょう。

中国大会につながるサッカー大会の大事な初戦。膝の半月板損傷をした僕のせいで有利に進めていた試合にやっと勝った状態でした。僕のミスでと思うと、今すぐこの場から立ち去りたい衝動に駆られました。その時、「ズキッ。」試合中は忘れていた痛みが襲ってきました。すぐに病院へ行くと、手術と1ヶ月のリハビリが告げられました。僕は手術よりも何よりも試合のことが頭から離れません。

手術のあとの痛みは、もう言葉で表すことができないほどでした。しかし、手術は無事終了したのだから、あとは痛みをたえりハビリを頑張れば元通りチームに復帰できるはずそう信じて1ヶ月のリハビリも頑張りました。

チームは、僕の入院中、中国大会出場の切符を手にしていました。退院して2週間後に迫っていたその大会に、僕はスタメンのキーパーとして出場できると期待に胸を躍らせていたのです。リハビリを頑張った甲斐があったと喜んだのも束の間。スタメンとして起用されたのは僕の後輩の2年生でした。彼は僕の入院中、チームのゴールを守り、中国大会への原動力となっていたのです。1年の頃から当たり前のようにスタメン出場していた僕にとって、それは受け入れ難い現実でした。しかし現実には現実で仕方ありません。それからの僕は、死ぬ気になって練習に励みまして2回戦前日。今度こそと期待していた僕に監督が告げたのはまたしても後輩の名前でした。あれほど頑張ったのに。しばらく呆然と立ちすくみ、悔し涙をこらえながら、気持ちを切り替えて応援に徹しろ、と自分に言い聞かせるしかありませんでした。

試合当日、唯一できることは大きな声で応援することだけ。そんな僕にチームメイトは「おまえの分まで頑張るからな。」と声を掛けてくれました。お互い1点を取り合う攻防戦。僕は必死に応援しました。最後はPKで、180センチを超える相手キーパーに制され試合は終了。僕は悔しさで仲間の顔を見ることさえできませんでした。

ところが、ベンチに戻ってきた仲間の言葉に僕ははっとしました。「お前の声がしっかり届いて頑張れたよ。だけど負けてしまってすまん。」スタメンが当たり前だと思っていた頃の自分はベンチの仲間にこんな言葉を言ったことはありません。今までの僕は何とも思っていなかったのでしょうか。僕が頑張れたのは自分だけの力じゃない！そのことがはっきりと分かりました。スタメンから外れるという経験は、今まで見えなかったもの、気付かなかったものに目を向けさせる自分に変えてくれました。

サッカーはプレーする選手、応援する人、全ての力が結集して大きな力になる。僕はそのことを胸に抱き、これからもサッカーに挑みます。



### 伸びゆく私

広島県立広島中央特別支援学校

3年 田村 愛 優

2年前、私は「中学生になって」という題で自分の夢に向かっていろいろなことをがんばるぞという決意の作文を学校の弁論大会で発表しました。

そして、3年生になった私は、ちょっと夢に近づけているような気がします。入学した時よりできることが増えたなあと思うからです。

一つ目は、点字の読み書きのことです。

私は、生まれつき目が見えません。だから小さい頃の私は、手で物を触るのが怖くて、触らせられないように手をグーにしていました。慣れない人に触られるのも怖くて、よくギャーと泣いていました。

そんな私が点字を読めるようになったのは、小学部3年生の時です。まず、物に触ったり、触られたりする練習をしました。慣れてから、一文字ずつ読む練習をして、1年かかって文章が読めるようになりました。それまで、人に読んでもらっていた本を、自分で読めるようになって嬉しかったです。

点字用のタイプライターで点字を打てるようになったのは4年生です。点字盤で字を打つ練習は5年生から始めましたが、中学部1年生になっても、まだ打つのはほとんどタイプライターを使っていました。それから毎日毎日点字盤で五十音を打つ練習をしました。点字の競技会で級が上がった時はとても嬉しかったです。2年生からは、授業のノートも全部点字盤で打てるようになりました。「田村さんの打つ点字はきれいね。」とほめてもらえるのが嬉しいです。これからはがんばりたいです。

二つ目は、パソコンが使えるようになったことです。点字のソフトは、読み上げを聞きながらタイプライターと同じように打てるので楽しいです。初めは点字の文章だけでしたがワードの文章も打てるようになりました。パソコンが漢字の意味を読み上げるのやカタカナは声が変わるのを聞きながら、自信をもって打てるようになりました。

最後は、杖で歩くことです。小学部の頃は学校の杖で持ち方や「ちょうどいい幅」の振り方の指導を受けていました。

それから中学1年生の夏休みに白杖を買ってもらってから、「つえ子ちゃん」と名前を付けて、一緒に道を覚えたり、歩き方の練習をしました。

そして、ついに去年の秋、学校の近くのザ・ビッグまで、杖で歩けました。やったー。

去年、マララ＝ユスフザイさんのノーベル平和賞受賞のニュースを聞きました。点訳してもらった新聞でマララさんの言葉も読みました。世界にはいろいろな子供がいました。学校に通えず仕事をさせられたり、まだ子供なのに結婚してお母さんになられたり、戦争で殺されたり、人を殺したりさせられている子供もいました。

マララさんは「学校に通えない子供になるのは、これで最後にしましょう。」

そして、「One child, one teacher, one pen and one book can change the world.」と、言いました。わたしも、そう思います。

「伸びゆく 私」 この私は学校に通えている幸せを忘れないでもっともっと学ぼうと思います。

そして、未来に向かって伸びゆけ私！



## 何時か

広島市立宇品中学校

1年 山 田 太 治

「黒い。」これから皆さんは何を連想しますか。僕は自分の肌のことを連想してしまいます。なぜなら、僕の肌は黒いからです。それは、サッカーをしていることが理由の一つです。僕は小さい頃からサッカーをしています。初めてサッカーのチームに入ったのは年長の終わりごろでした。毎日サッカーの練習をする僕は、必然的に日焼けをしてしまいます。だから僕の肌は黒いのです。努力の成果もあり、この夏に行われたACミランのジュニアキャンプでMVPに選ばれ、来年の春にはイタリアに行くことも決まりました。僕はこの焼けた肌を努力の結晶だと思っています。相手が悪ふざけで言わなければ。

僕はこの肌に何度も悩まされてきました。軽々しく「黒い」「焼けている」と言ってくる人がいるからです。実は、僕の肌が黒いのに、サッカーの他にもう一つの理由があるのです。それは「血」です。僕の体を通る血は「純正日本人」ではないのです。僕には日本人の血だけでなく、他の血も流れています。だから「純正か」と言われれば、確かに違うのです。ですが、生まれてくる場所や状況を選ぶことはできません。ましてや、「血」を選ぶことはできないのです。僕はこの血によって黒い肌をしています。そのせいで何度も嫌なことを言われ、つらく悔しい思いをしてきました。ですが、僕はこの状況を不幸だと思ったことは一度もありません。むしろサッカーができるこの環境にいること、サポートしてくれる家族がいることに僕は感謝しています。いまではこの様に思えますが数年前までは違いました。

小学校5年生、僕の我慢の限界を超える事件が起きました。繰り返される「黒い」「焼けている」という言葉。我慢の限界を超えた僕は「しつこいんだよ」と無意識に言い放ちました。相手を見ると「ごめん」と一言。

加害者の罵声は加害者自身が思っている以上、想像よりもはるか上に行く凶器となります。あなたが軽く言い放った言葉の数々が、人をどれだけ傷つけるか、考え、感じたことはありますか。重みを知って、苦しみを知って、悔い改めてほしいと、思い続けてきました。

「偏見」や「差別」……皆さんは好きですか。僕は嫌いです。存在を否定し、生きることまでも「偏見」や「差別」。これを優しくオブラートで包み込むことは不可能です。その言葉。行為からは何も創り出せない、何も変えることができないのです。

僕たちがこの言葉と行為を拒絶していくこと。新しい何かを生み出すにはそうしなければいけないのです。

「黒い」。この言葉への誇りを胸に、僕はこれから先も、未来へ伝えていくつもりです。

そして何時か、純正日本人ではないことを誇りに思えるそんな日がくると信じています。

さまざまな色が手をつなぎ、一色に変わる日が何時か、何時か、何時か、きっと。



審査委員長

東京教育研究所主任研究員・広島教育実践研究所所長

山 本 名嘉子

今回、約7千名に近い応募原稿の中から、今日は25名の方がご発表をされるということになりました。

本当に力強い、心のこもった発表の一つ一つに、審査員一同、皆心を揺さぶられました。それに点数をつけるということは大変難しいことなんですけれども、やむを得ずいろいろと話し合った結果、順位を決めさせていただきました。

まず、全体の感想を申し上げますと、全体にレベルがとて高くなつたのではないかと、皆さん上手に話をされるようになった、レベルがそろつてきたということを感じました。素晴らしいことだと思います。

それと同時に、これは今日まで練習をし、原稿を書き、聞いてもらったり、いろいろな人のご指導を受けての努力の結果だと考えております。その点に大変敬意を表します。

審査の基本は主に3点あるかと思ひます。

一つは内容。どんなことを取り上げてどのように自分の考えを主張しているかという内容。それがいかに論理的に論旨が一貫しているかということ。

二つ目は表現の問題でございます。こうしてみなさんの前で発表するのですから言葉が伝わらなくては行けない。その工夫、努力がいかになされていたかという問題。

最後は、深く感銘させたかという感銘度の問題。

この3つが大きな柱ではないかと考えております。

まず内容の面を大きく分けて考えてみますと、まず感心しましたことは、身近な出来事、体験、そういったことをしっかりと見つめて、そして深い洞察といいますか、自分なりの考え、ものの見方を生み出している。本当に見過ごしがちなことが、その人の目に留まって、そして自分を変えるような大きなものになっていくと、その過程が段階を追って良く話されていたと思ひます。

例えば、宮尾さんの「届けよう」というご発表がありましたが、思いやりを届けるということ、それは相手の立場に立つてというところまで行くのですけれども、どんなふうにしていけばいいのか、思いやりを届けるということはどういうことなのかということをついぶん深く考えていたと思ひます。そして強い主張があつたように思ひます。静かな語り口の中に強いしっかりとした主張があつたように思ひます。



同じようなことですが、席を譲るとい問題を取り上げました平田さん、席を譲るということ、それをどのように考えていけばいいかという問題。こういうふう身近な問題を見落とさないで取り上げていた、そこに素晴らしいものがありました。

「ゴミが絶えさせてしまった命」、自分が拾わなかったゴミ袋かもしれない、そのゴミ袋が猫の顔にかぶさってというふうにして、自分はこれからゴミを拾おうという決意を話された永岡さん、少し話し方に工夫があればもっと強い主張が出たのではないかと思います。

そうした身近なものに加えて、広く社会の問題に目を向けた人もいました。

例えば被爆の問題、藤井さんは被爆者の思いを聴くということについて、その思いを聴くということはどういうことなのか深く考えていって自分がなすべきことを見出している。私たちも多くのことを学ばせてもらいました。同じく牟田さん、これもピースサミットに参加していき、その中で様々に勉強したという、その勉強をしたということを通して自分のやるべきことを見つけていった。淡々と話されたのは少しものたりないような感じも致しましたがけれども、いずれも心に残るものでありました。

また、井元さんの「バナナの輪」とか、光井さんの「『こ食』改善論」といったような現代の社会風潮にかかわるような問題を取り上げたのも非常に心に残ったことでございます。

更に、中学生がたくましくなったなとつくづく思ったことがございました。

難聴で耳が聞こえなかったこと、それを補聴器をつけて聞こえるようになったときにどんな世界が見えてきたかということ話をされた山口さん、本当に感動が伝わってまいりました。それから田村さんの「伸びゆく私」、一つ一つ自分の課題を乗り越えていった、本当にたくましい、まさに生きていることを励まされるようなお話でありました。生きている喜びが伝わってくるような話しぶりであったと思います。それから、森山さんの「明日へのキックオフ」、けがをしてスタメンから外されてしまったという問題、そこから見えないものが見えるようになった。みんな自分の逆境をいかに乗り越えていくか、中学生がたくましくなったと感じたスピーチであったと思います。

そのほかにも、たくさんありました。「一枚の紙」に励まされた秋村さん、「ともに生きる」ということ話された伊藤さん、いろいろ本当に一生懸命に生きているということを感じさせられるご発表が続いて、本当に力強い、これからの未来を託していく若者になるなと喜ばしく思った次第であります。

まとめますと、内容では身近なものから自分の考えを導き出して、ほんやり見ないで、見過ごしてしまわないでというところです。生活やいろいろな体験ですね。それから身近な事実、特に家族とのかかわりの中で気づいたこと、これもまた非常に心を打ったものであったと思います。

人としての思いやりということ、あるいは、お互いの思いやりが、様々な形で発表されたのが、今回の「少年の主張」2015の一つの特徴ではなかったかと思うほど、人とのつながりというものを聴く者に考えさせるものであったと思います。

それで、こういう話をするときは内容だけではありませんで、発表するということ、表現をするということはとても大事ですね。今日は原稿を読む人はいなかった。時々忘れることはあるかもわかりませんが、読む人はいなかった。それが大変素晴らしかったと思います。しかし、その一つ一

つの言葉が本当に自分のものになっていたのかなというような疑問を感じさせるものもないことはなかった。内容に合った話し方という言葉で言えるのかもわかりませんが、自分が伝えようとしていることの中身にふさわしい話しぶりというのはあるのではないかと思います。それは技術ではありませんで、一本調子ではいけないとか、始め元気よく話し出してみんなをびっくりさせて、ぐっと引きつけてというような、そういうような技術めいたことではないのではないかと思います。言葉を伝えるのは技術ではなくてやっぱり心だと思うんですね。嬉しいときには嬉しい、そういう気持ち表れる話し方、悲しいときには悲しい、そういう心に沿った表現の仕方が出てくるのではないかと思います。それが感銘を強くするのではないかと、深く人々に感動を与えるのではないかと思います。

お話をすることは大変難しいですね。こういうふうに思って、こう伝えたいと思っけていても、ここに立ちますとそのようにはならなかったり、あるいは忘れてしまったり、大事なことを落としてしまったりするものです。ですが自分が今何を伝えたいのかということを常に考えながら発表をしていただくと良いかと思います。

今の時代、言葉が少し問題になるのではないかという気がいたします。IT化が進みまして生の人間が伝え合うということが難しくなっていると思います。言葉を大切にということが少し弱くなっているような気がいたしますね。だからこそ言葉を大切にしたい。言葉を大切にということは、言葉でよく考える人間に、言葉で自分の気持ちを十分に伝えることができる、そういう人にお互いに努力をしてなっていきたいと思います。そのことが結局分かりあったり、助け合ったり、一緒に生きている喜びを感じ合ったりする、そういう生きる喜びや幸せにつながっていくことではないかと思うんですね。難しいことかも知れませんが小さなところから私たちは努力をしていかなければいけないと思います。

日本の未来は若い皆さんの肩にかかっています。どうぞ言葉の力を鍛えて、自分の考えを伝える言葉、わかってもらえる言葉を、それらを粘り強くあきらめないうで伝え合っていきたいと思います。そうするところに言葉の力は育ってくる、伸びてくるんだと思います。

今日までの体験、今日の体験、様々な人からいただいたであろう助言、そういったものを自分の力にして一層大きく伸びていかれることを祈って、講評といたします。

# 「少年の主張」・中学生話し方大会 2015

第 37 回「少年の主張」広島県大会開催要領  
第 49 回中学生話し方広島大会開催要領

- 1 趣 旨  
21 世紀の国際社会に生きる子どもたちには、論理的に物事を考える力、自分の主張を正しく伝える力、広い視野と柔軟な発想や創造性などを身につけることが求められている。  
この大会は、中学生が話すことによって伝える力を育み、学び合う機会となるとともに、意見発表を通して、中学生への理解と認識を深めてもらうことをねらいとする。
- 2 対 象  
広島県内の中学生
- 3 主 催  
公益社団法人青少年育成広島県民会議・広島県中学校話し方連盟  
独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 4 協 賛  
国際ソロプチミスト広島・広島清流ライオンズクラブ・(公財) 広島青少年文化センター
- 5 後 援  
広島県・広島県教育委員会・広島市・広島市教育委員会・広島県公立中学校長会・広島県私立中学高等学校協会校長会・中国新聞社・NHK広島放送局・中国放送・広島テレビ放送・広島ホームテレビ・テレビ新広島
- 6 開催日時  
平成 27 年 9 月 19 日（土）9：30～15：00
- 7 日 程  
9：00～9：30 受付  
9：30～9：45 開会行事  
9：45～12：00 発表「午前の部」  
12：00～13：00 出場者記念撮影，昼食  
13：00～14：00 発表「午後の部」  
14：00～14：30 「少年の主張」全国大会のDVD上映  
14：30～15：00 審査発表，表彰，閉会行事
- 8 開催場所  
エソール広島  
広島市中区富士見町 11 - 6 (TEL：082 - 242 - 5252)
- 9 発表内容  
次の A,B,C の中から、日ごろ心に思っていること、考えていることや感じていることを、自由にユニークな発想と、飾り気のない言葉でまとめたもの。  
A 社会や世界に向けての意見，未来への希望や提案など。

- B 家庭, 学校生活, 社会（地域活動）または, 身の回りや友だちとの関わりなど。
- C テレビや新聞などで報道されている社会の様々な出来事に対する意見や感想・提言など。
- 10 発 表 小道具は, 使用しない。  
発表時間は5分以内を厳守すること。（目安として400字詰め原稿用紙3枚半程度）
- 11 応募方法 申込書に原稿を添えて, 中学校長を経由して提出する（原稿は返却しない）。  
ただし, 市町, 青少年育成市町民会議等の類似の大会で入賞した中学生の応募も可とする。この場合, 市町等においてその旨を付記して, 市町等から提出するものとする。  
原稿はB4判400字詰め原稿用紙を使用すること。
- 12 申込締切 平成27年8月10日（月）必着
- 13 事前選考 提出された原稿を主催者において審査し, 大会出場者を決定する。なお, 大会の出場資格を得た者については, 各中学校長等あてに8月末日までに通知する。
- 14 審 査 審査は, 学識経験者, マスコミ関係者, 関係行政機関の職員, （公社）青少年育成広島県民会議及び広島県中学校話し方連盟並びに協賛団体の代表者によって構成する審査会で行う。
- 15 表 彰 広島県知事賞・（公社）青少年育成広島県民会議会長賞・広島県中学校話し方連盟会長賞・国際ソロプチミスト広島会長賞・広島清流ライオンズクラブ会長賞（各1名）, 優秀賞（6名程度）及び優良賞を選考し賞状を贈る。
- 16 副 賞 この大会で, 広島県知事賞, （公社）青少年育成広島県民会議会長賞, 広島県中学校話し方連盟会長賞, 広島清流ライオンズクラブ会長賞, 国際ソロプチミスト広島会長賞を受賞した5名には, 副賞（約1週間の海外研修）が（公財）広島青少年文化センターから授与される。  
時 期：平成28年8月上旬予定  
訪問先：韓国
- 17 その他 この大会で, 県知事賞を受賞した者を, 独立行政法人国立青少年教育振興機構主催の「少年の主張」全国大会（11月8日（日）東京で開催）への出場候補者として推薦する。
- 18 問い合わせ先 公益社団法人青少年育成広島県民会議「少年の主張」係  
申込み先 〒730-8511 広島市中区基町10-52（広島県環境県民局県民活動課内）  
TEL：082-513-2742



# 審査員及び審査基準

## 1 審査員

|       |         |                          |
|-------|---------|--------------------------|
| 審査員長  | 山 本 名嘉子 | 東京教育研究所主任研究員・広島教育実践研究所所長 |
| 審 査 員 | 稲 垣 万由美 | 国際ソロプチミスト広島会長            |
| 〃     | 川 上 慶   | 広島清流ライオンズクラブ会長           |
| 〃     | 清 川 徹   | N H K広島放送局アナウンサー         |
| 〃     | 倉 迫 昭 宏 | 広島県環境県民局県民活動課長           |
| 〃     | 黒 小 大 介 | 広島県教育委員会義務教育指導課指導主事      |
| 〃     | 齋 藤 司   | 広島県中学校話し方連盟顧問            |
| 〃     | 田 原 直 樹 | 中国新聞社論説委員                |
| 〃     | 樽 谷 和 子 | (公財) 広島青少年文化センター館長       |
| 〃     | 津 田 智 子 | 広島市教育委員会指導第二課指導主事        |
| 〃     | 山 内 吉 治 | (公社) 青少年育成広島県民会議副会長      |

(50 音順, 敬称略)

## 2 審査基準

概ね次の点を採点のポイントとし, 内容, 論旨, 表現, 態度等総合的に評価を行う。

① 鋭い感性で, 新鮮な主張であるか。

(柔軟な発想に基づく意見や提言, 未来への希望や夢・メッセージ, 新しい情報や視点など)

② 具体的な内容とともに, 一般性・社会性の広がりがあるか。

③ 提案や提言を表現・実践する意欲や積極性が感じられるか。

④ 論旨が一貫し, 構成がしっかりしているか。

⑤ 発表に熱意が感じられ, 迫力があるか。

⑥ 主張の内容が感銘と共感を与えているか。

⑦ 説得力のある話し方であるか。

⑧ 発表の早さや間のおき方, 姿勢が適当であるか。

# 青少年育成の基本指針

(昭和 52 年 6 月 1 日青少年育成広島県民会議制定)

## 前 文

「青少年は日本の希望である」という言葉は、われわれの心を支えている標語である。ところが、青少年の非行が問題になると、明確な実施効果の見定めもつかぬままに、条例や法律の制定に期待の高まるのが実状である。しかし、青少年の非行が大人の生活の反映であるとすれば、青少年の健全育成は、大人の反省なしには実現しないであろう。大人がかつて青少年であったように、青少年はやがて大人になるのである。人間の生涯は、多様な価値観の個性的選択による自己教育の連続であるといえよう。

ここに制定された青少年育成の基本指針は、ただ青少年育成のあり方を抽象的に示したものに過ぎない。それは、各地域の実状に応じて具体化されることが期待される。総括的にいえば、資源の乏しさを克服して、相当高い生活水準に到達している現代日本において、青少年は将来どのような展望をもって進んだらよいか、これが最大の課題である。

われわれは、青少年の前途に幸福の「青い鳥」の夢を託したい。

## 青少年育成の基本指針

### (個 人)

- 1 個性の独自性に対する自覚にもとづき、その価値可能性を錬磨し、生涯教育の基礎をつくる。

### (社 会)

- 1 家庭の愛情にはぐくまれ、社会生活において、友情と連帯の意識を養う。

### (自 然)

- 1 国土の自然を愛護するとともに、地域社会の文化を尊重し、環境の教育的整備につとめる。

### (世 界)

- 1 諸民族の生活と文化を理解し、平和と親善の心をこめて、国際交流に寄与する。

### (総 括)

- 1 日々の生活のなかに、生きがいを求めてわが道を行き、一隅を照らす光となる。

## 発行

公益社団法人 青少年育成広島県民会議

〒730-8511

広島市中区基町 10-52 広島県環境県民局県民活動課内

TEL 082-513-2742 FAX 082-511-2173

URL: <http://www.hiro-payd.or.jp/>



# 大人の私たちから 支援の手を…

非行からの立ち直りは一人ではできない。  
いつかきっとにぎり返してくれる時が来る…



## 11月は全国子ども・若者育成支援 強調月間です。



広島県の  
青少年支援キャラクター  
ゆっぴー